

「田井の子供神相撲」とオペラ「扇の的」

去る9月23日秋分の日、牟礼町六萬寺の境内で催された1000年以上の歴史を持つとされる「田井の子供神相撲」を見学してきました。奈良時代に聖武天皇が名僧行基に命じて建立させたとされる六萬寺に奉納される神事として子供神相撲が生まれ、平家がこの地に行在所（あんざいしょ）を構えていた1183年には、5歳ごろの安徳天皇をお慰めしようと、この神相撲をお見せしたと伝えられています。そうであれば、平家滅亡直前の時期に屋島近辺で過ごされていた安徳天皇が、ほんのひと時でも確実に心安らいた時間を持てたであろうことが想像でき、安堵を覚えます。

当日は穏やかな曇り空。神事が行われた後、子どもたち10人が小結、関脇、大関の順で相撲の型を行い、最後に全員で土俵入りをしました。昔からの伝統と格式にのっとり、「やー」という型の決めの部分で発せられる子どもたちの威勢のいい掛け声が田野に響き、厳かに神相撲は進められていきました。歴史の深さが格調になって表れているような、後世までずっと残していきたい伝統行事だと感じました。

翌24日午後。今度はサンポートホール高松大ホールにおいて、四国二期会のオペラ公演「扇の的」を鑑賞しました。3年前のサンポートホール高松の開館10周年を記念して創作、初演されたこのオペラは、源平屋島合戦の中で最も有名な、那須与一が扇の的を射る場面を題材にして、どんな苦難、逆境にあっても「生きる」ことが大切だということをテーマとしたものです。台本や作曲・演出などをオール香川でそろえた本格オペラとして発表当時から注目されたものを今回、今後の海外公演も目指し、グレードアップしたということです。関係者の意気込みもあってか、初演以上の素晴らしい出来栄で、思わずブラボーと叫び、久しぶりにカタルシスを感じた公演でした。

1000年以上も続く伝統行事が保存、実施されていることも、由縁の題材で魅力ある個性的な音楽作品が創作、上演されることも、屋島を中心とした地域の歴史が持つ資源としての力が作用しているのではないかと思います。この地の歴史と文化資源の豊かさを改めて思い知らされ、この地で生活し、創造することの有難さを感じた秋の二日間でした。